

## 「第二十四回庭野平和賞」 総裁ご挨拶

本日は、「第二十四回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、（主なご来賓の名前を挿入）をはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、「財団法人・台湾仏教慈濟慈善事業基金会」の創始者であられる證嚴法師にお贈りできることは、大変光栄に存じます。

先ほど、ご紹介がありましたように、「台湾仏教慈濟慈善事業基金会」は——簡略に「慈濟基金会」とお呼びすることをお許し願います——世界有数の佛教ボランティア団体であります。

慈濟基金会には、柱となる四つの活動がございます。それは、慈善、医療、教育、人文つまり文化の普及であります。また国際救援、骨髄バンク、環境保護、地域ボランティアにも取り組んでおられます。そのどれもが、台湾国内はもとより世界各地で積極的に推進され、一九九五年には、證嚴法師がノーベル平和賞の候補にノミネートされています。慈濟基金会の世界的な評価の高さを伺い知ることのできる出来事であります。

私自身、今月の上旬には、台湾東部・花蓮市にある慈濟基金会本部を訪問致しました。その際、證嚴法師と対談する機会を得たほか、花蓮や台北にある諸施設を見学することができました。

そして、證嚴法師はじめ、数多くの方々との触れ合いを通し、「慈濟基金会の心」というものを改めて深く学んだのであります。

慈濟基金会の諸活動は、その規模の大きさ、国際性などが注目されがちです。しかし、慈濟基金会の「慈濟」とは、「慈悲濟世」の略であり、仏の慈悲心をもって、人々をあまねく濟世・救済するところにあります。また、全ての人間が、自らの仏性を開顯し、皆が菩薩となることを目標としておられます。何よりも一人ひとりの宗教的な自覚を通して、釈尊の心を現代に体現されているのが、慈濟基金会であると申せます。

私は、慈濟基金会の根本精神には、大きく分けて四つの特長があると受けとめております。

第一に、「人を救うことは、自身の救われである」という精神であります。

仏教には、「自利利他」という言葉があります。それは、人のためになる行いをすれば、いずれは巡りめぐって自分の利益になるという意味ではございません。利他之心を持ち、実践することが、実はそのまま自らの救われであり、幸せであるという考え方であります。

慈済基金では、援助を必要とする人がいるからこそ、人に奉仕する機会を頂くことができると、常に感謝の心でボランティア活動に取り組んでおられます。その精神が誠に素晴らしいと思います。

第二の特長は、「心田（いわゆる心の田んぼ）に善の種を蒔き、耕し続ける」という宗教的な志です。

この世のさまざまな出来事は、全て人間の心から生じるといつても過言ではありません。この点について、證嚴法師は、次のように述べられています。

「心田にたくさん善の種を蒔こう。善の種が一粒増えれば、雑草は一本減る。土地は耕さなければ、必ず雑草が生い茂る。従って、善行は一日も怠ることなく、一時も怠ることなく、根気よく続けなければならない。ちょっとした動作にも、善の心を忘れないようにしよう」

より良い社会、世界を目指し、衆生の心田を耕し、荒れ地を豊かな田に変えていくことが、慈済基金の何よりも大きな目標なのであります。

第三には、「人間には、仏と同じ本性がある」という確信であります。

證嚴法師は、「仏法の生活化」「菩薩の人間化」ということをたびたび説かれています。菩薩とは、悟りを求める人間一人ひとりであり、全ての衆生が仏となる可能性を秘めた、かけがえのない存在であると信じておられます。

人間の心には、皆、仏性があり、それを積極的に開発しきえすれば、この世は、必ず平安になるという絶対の確信から、慈済基金の全ての活動が始まっているのであります。

第四の特長は、「今この瞬間を大事にし、精いっぱい生きる」という日々の姿勢です。

仏教の核心となるのは、「この世のあらゆる物事は一瞬も止まることなく変化している」という無常の法であります。私どもは、毎日、創造、変化しながら、生かされて生きています。そしてやがては、皆死を迎えます。この事実からは、誰一人逃れることはできません。

證嚴法師はいわれます。「この世の寿命は短いからこそ、なお尊い。せっかく人間として生まれたからには、世のために自分の能力を発揮したか否かを問うべきである。ひたすら長寿のみを追い求めるべきではない」と。

今この瞬間を、慈悲の心で満たし、なすべきことに専心するのが、慈濟基金会の方々の基本的な姿勢なのであります。

こうした慈濟基金会の特長は、まさに釈尊の精神そのものであります。その上で、現実には、觀音さまの如く社会問題を解決し、病の人に対しては、病院を建設するなど薬師さまのような働きもなさっています。また貧しい人々がおられれば、地藏さまのように寄り添い、救いの手を差しのべてこられたのであります。

釈尊の心を体しつつ、一人ひとりが菩薩になりきり、慈悲行に徹してこられた慈濟基金会の皆さまを、私は、心から讃歎したいと思います。そして、慈濟基金会を設立され、多くの会員を導いてこられた證嚴法師に、深く敬意を表するものであります。

世の中には、自己中心の価値観が、依然として根強く残っております。その中にあって、慈濟基金会による仏の慈悲の働きが、今後ますます広く、深く、またいつまでも展開されることを願ってやみません。

本日の贈呈式を契機として、慈濟基金会の精神が一人でも多くの人々の心に根づき、また證嚴法師がご健康で、一層ご活躍くださることを祈念し、あいさつと致します。

皆さま、ありがとうございました。